

若きフランクルにおけるロゴセラピーの構想

－青少年相談所の実践に着目して－

荒金 誠

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生

The Young Frankl's Concept of Logotherapy: Focusing on the Implementation of Youth Counseling Centers

Makoto ARAKANE

Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science
of School Education, Hyogo University of Teacher Education

The purpose of this study is to explore the formation of the young Frankl's ideology up until the time of his internment in the Nazi concentration camps. In particular, this study reveals how, in his youth, Frankl formed his ideas for his original form of therapy, logotherapy, based on the knowledge he acquired implementing youth counseling centers, while also examining the essential components of his logotherapy. As a result, it has been made clear that the view of humanity on which Frankl founded his doctrine of logotherapy is one that views human existence as having a responsibility regarding the fulfillment of meaning and actualization of worth. Logotherapy is essentially education toward responsibility, and from this responsibility, people must push on toward a tangible meaning of self.

キーワード／ロゴセラピー，責任，態度決定，青少年相談所

Key words / logotherapy, responsibility, behavioral determination, youth counseling centers

I はじめに

フランクルは、1905年ウィーンに生まれ、フロイトとアドラーに師事して精神医学を学ぶ。しかし、フロイトの精神分析、アドラーの個人心理学に飽き足らず、その限界を感じ、それを補完するものとして、ウィーン第三学派の流れとなる新しい心理療法を提唱する。フランクルの提唱する新しい療法は、「ロゴセラピー」「実存分析」と称されるが、ロゴセラピーは、精神的なものからの療法であり、実存分析は、人格的、精神的実存の深さを測るという意味で、精神的なものに向けられた療法である。ロゴセラピー・実存分析は、自らの存在の中に意味の契機を発見させ、価値の可能性を感じ取らせるのを援けようとする心理療法的な実存の解明とその方向性の示唆と言える。フ

ランクルのロゴセラピー・実存分析は、意味、価値、精神が現実の場を持っている人間像を前提とする。価値の実現と意味の充足とに対して責任ある人間像を、意味志向的な人間像を前提とする。

フランクルが、公の場で初めてロゴセラピーについて話したのは、1926年、講演の中においてのことであった。さらに、ロゴセラピーの技法としての逆説志向を実践したのは1929年からであり、それを発表したのは1939年のことであった。また、最初に「実存分析」という術語を用いたのは1933年であった。すなわち、フランクルが、彼の思想の核心とも言えるロゴセラピーの構想を生み出したのは、彼が強制収容所に収容される前の1930年代であり、彼の思想は、1930年代には既にある程度、構築されていたのである (Frankl, 1995:4-45 [80-82])。フランク

ルは、彼の思想の体系的な著作として『Ärztliche Seelsorge』（邦訳『死と愛』）を第二次世界大戦直後に著しているが、その思想の大枠は強制収容所に収容される前にでき上がっていたことを、自ら表明している（Frankl, 1956:170[96-97], 1995:75-77 [131-132]）。

強制収容所に収容される以前に、若くしてほぼ体系化されていたフランクルの思想を解明しようとするとき、彼の思想形成に大きな役割を果たしていると考えられる二つの側面が注目される。一つは、シェーラー、ヤスパース、ハイデッガーらの思想的影響である。もう一つは、彼の体験から蓄積された、豊富な実践の中から獲得した叡智である。具体的な豊富な臨床例からつかみ取った、体験に裏打ちされた真の人間理解とその展開である。フランクルは、多くの極めて具体的な実践の中から、独創的なロゴセラピーの構想を生み出していった。本研究では、彼の思想に影響を与えたと考えられる後者の実践的な側面、殊に、青少年相談所（Jugendberatungsstelle）における活動について焦点を当てて研究を進めていく。ここでの彼の実践が、彼の説くロゴセラピーの理論構築にどのような影響を与えたのかを、フランクルの若き日の著作を中心に読み解くことにより探究していく。

フランクルの生涯を概観すると、彼は思弁の人ではなく、まさしく「実践の人」であった。臨床実践的に基礎づけられた人間の事実どこまでも忠実であった。フランクルは、若くしてフロイトの心理療法に魅了され精神分析を学び、フロイトの心理学に傾倒していくが、その後次第に、彼の関心はアドラーの個人心理学に移っていく。しかし、自身のニヒリズムとの対決、社会主義の青少年労働者組織における講演とその後の質問への応答、また、悩める青少年との相談活動を続ける中で、次第に、フロイト、アドラーの心理学の「還元主義」に疑問を抱き始める。実際は豊かで広やかな人間の行動と思考を、ある一つの単純な基礎的な衝動に縮小し還元してしまうという心

理学主義の罠に陥ってしまっていることを看破する。フロイトとアドラーの心理学の限界を見破ったフランクルが、彼らから決別していかざるを得なくなるのは必定であった。この時期は、まさに、フランクルが、苦悩する青少年の危機的状況を憂慮し、青少年相談所の設立に奮闘していた時期と合致する。フランクルのロゴセラピーと実存分析は、理論と実践をつなぎ、理論から実践、実践から理論への橋渡しを成し遂げようとして、自らの心理学的理論を弁証法的に深化させようとした苦闘の末の産物であったと考えられる。実践を積み重ねる中で、自身の思想と心理学的理論の壁を突破して、ロゴセラピーを創出していったフランクルの足跡を丹念に辿っていくことは、殊に、強制収容所という限界状況、「十字架の試練」（Frankl, 1995:75 [130]）をもくぐり抜けて耐え抜くことのできたフランクルの理論構築の奥義を探ることは、古くて新しい「理論と実践の融合」というシエマの課題探求の上でひじょうに大きな意義をもつと考える。

フランクルの「Geist」、あるいはまた、フランクルの「生きる意味」に着目し、若きフランクルの思想形成を研究したものに、ツォック、クライトマイアー、リーマイアー等の著作があるが、「青少年相談所の設立とその活動」については、ほとんど論究されていない（Kreitmeir, 1995, Zsok, 2005, Riemeyer, 2007）。諸富祥彦も、フランクルの思想形成における研究においては第二次世界大戦前の彼の論文の検討が中心に据えられなければならないが、大戦前のフランクルの論文に詳細な検討を加えた研究論文は見当たらないと記し、「フランクルの思想の本質を改めて捉え直すためにも、大戦前の彼の思想の検討は不可欠だ」と述べている（諸富, 1992:73）。本研究では、若きフランクルが、青少年相談所を創設して相談助言を実践していく中で、どのように彼独自の人間観を形成していき、それに基づいてどのようにオリジナルな療法を確立していったのかを明らかにすることにより、フランクルのロゴセラピーの

真髓に迫っていきたいと考える。

II ザウアーをモデルにした 青少年相談所の設立

1 ザウアーの青少年相談所

若きフランクルは、戦前、ウィーンを中心に青少年相談所を組織し、そこで、心的な困窮の中にある青少年を無料で支援するが、そのモデルとなったのが、「ザウアーの青少年相談所」であった。

ベルリンのドレースデン銀行の文書保管係ザウアーは、1910年代から20年代のドイツの、心的苦境にある青少年の切迫した状況を提示し、青少年たちが見出すべき助言、援助が存在していないことを、彼の書物の中で訴えた。ザウアーは、青少年の困窮の中でも特に、自殺の増加、犯罪の激増、そして犯罪予備軍として待ちかまえている、劣悪な環境下に置かれている青少年の存在を、統計的資料をもとに指摘した (Sauer, 1923:12, 18, 22-25)。

青少年が絶望して自殺に向かっていくのを防ぐために、ザウアーは、進んで若者たちを援助しようと考えた。彼は、青少年の男女の生徒、徒弟、労働者と勤め人に対して、必要な時に助言や援助を求めることができる、青少年相談所の開設の考えを実行に移すことを、世界大戦の前に企図し主張した。誘惑にさらされている若者たちに対して開かれる青少年相談所の形態を明らかにし、青少年相談所は何を成し遂げることができるのかを明確に示した。

ザウアーの青少年相談所の輪郭

- ・未成年の若者が学び働いている所では、すべての教室、事務室、工場の部屋と作業室の中に、信頼のおける、世間で活動している男女のリストが掲示される。
- ・心的に困窮している21歳までのすべての青少年たちは名前を名のらないで行き来できる。
- ・掲示されたリストから助言者を選択でき、住

まいの近くで助言を受けることができる。

- ・熟練の相談助言者は、決まった時間に、訪ねて来た青年に対して、喜んで相談する心づもりがあり、助言と行為によって親切に援助する。
- ・相談助言者は、名誉職として無料で、秘密を守って男女の若者のために奉仕する。
- ・書類の束や記録はない、無愛想な態度はない。

(Sauer, 1923:31-32)

「それは、自由な国民の自由な機関である。適切な選び抜かれた人たちが、最も広い規模において、それに協力するだろう。それは、新式の、ひょっとしたら理想的な教育方法を描出している」(Sauer, 1923:35)と、ザウアーは青少年相談所の可能性の大きさを明言している。

ザウアーは、これまでの少年保護事業の功績を認知し評価もしているが、それは青少年を魅了する力に欠けていて、あまりにも遅く始まりあまりにも小さなサークルの中での活動であるとして、その限界を指摘する。新しい機関としての青少年相談所は、現存の福祉保護組織と対立するものではなくて、不幸が起こる前に予防する制度、臨時の援助者であり、党員名簿も信条も前科も父親の地位身分も母親の年齢も、彼らの出生地をも尋ねない、困窮の中における忠実な朋友であると、ザウアーは主張している (Sauer, 1923:35)。

1914年4月26日、ザウアーは、初めて『ベルリン地方新聞』の中で、青少年相談所の必要性について明白な考えを公表した。その考えは次第に、新聞雑誌、大衆に、そして官庁のもとに受容されていき実践されていった (Sauer, 1923:35-37)。

2 ウィーンにおける青少年の状況

フランクルもまた、青少年相談所の開設を心に抱くが、ザウアーの実践をモデルにして、ウィーンの青少年相談所を構想したことを、青少年相談所の方法と内容についてふれる度に述べている (Frankl, 1928a:84, 1928b:101)。当時のウィーンの青少年の心的苦境を、ドイツの青少年の困窮

と同質のものにとらえ、同じ方法で解決の糸口をつかむことができると考えたと推察できる。第一次世界大戦後のウィーンの青少年は、経済的ならびに精神的な価値が放棄されて崩壊しているだけでなく、人間生活もまた汚染され危険に晒され壊滅していた。青少年は、世界大戦とその後の経過により肉体的に打撃を受けて、日常の課題と再編成された環境との精神的な対決の問題、ならびに彼らの心的な態度への問いと格闘していた。フランクルの捉えていた当時の青少年の状況は、急を要していた。青少年を圧迫する人生の問題と葛藤を乗り越えるために、成熟した判断力を持つ人と語り合う機会が、彼らに提供されることはほとんどなかった。子供と両親の関係も、青少年と彼の教師の関係も、心中を打ち明けて助言を求めるには至らなかった (Frankl, 1926a:62)。

当時の日刊新聞の統計では、青少年の自殺の数は、驚くほど増加していた。ウィーンにおいては、1926年の最初の4半期中には、若い人の自殺を無視できず、青少年の自殺に関心を払わなければならない時がきていた (Frankl, 1926a:62)。自殺未遂、人生の倦怠、両親との仲違い等、様々な心的な葛藤があった。青少年の自殺は、当時の社会が克服していない問題として厳として存在していたが、解決の試みは不十分であった。青少年は、自らの秘密の重荷にもはや対処できないと自覚して崩れ落ち、挫折し絶望して自殺未遂を行うという破滅へと至っていた (Frankl, 1927a:73)。

青少年の自殺が積み重なる中で、それを予防できる可能性を見出すために、フランクルは、青少年相談所設立の計画の実現を切望した。信頼し合う中で心を打ち明けて語り合う人を知っていたら、自殺は防止できるとフランクルは考えた。

3 青少年相談所の創設の経緯

フランクルの構想した青少年相談所の目的は、思春期の苦境を乗り越えるのを助け自殺未遂を防ぐために、すべての青年に対して、あらゆる心的な苦境において、思慮分別のある相談助言者との話し合いの可能性を提供することであった。

ウィーンには、当時、教育上困難なケースにおいて、助言で両親を援助し、子供たちを心的な成長において保護する労働者会議所の教育相談所 (Erziehungsberatungsstelle) が既に存在していた。教育相談所では、青少年が、心的な困窮の中で、両親の同伴なしで助言を求めるために自発的に解決策を見出すために訪れて来ていた。若者は、信頼に値する人たちに助けを求めて相談に来ていた。教育相談所における実践的な経験は、困窮が最も大きいところでは、なじみのない人の助けが歓迎されることを証明していた。ただ、教育相談所での活動は、小さな一部の活動に制約されるとともに、原則的に両親が子どもを連れて来ることが可能である場合だけに限定されていた。青年が両親とともに教育相談所を訪れることができない年齢に達した時に、青年は、思春期の危機的な時期の只中にいた。これらのことから、青少年が内密に心中を打ち明けて語り合うことのできる固有の相談所を創設するという考えは、自然な帰結であった (Frankl, 1927a:75)。何よりもまず、社会民主主義的青少年運動にとって青少年相談は重要であり、プロレタリアの青少年組織において青少年相談所の組織化を緊急に進めたいと、教育相談所の協力者でもあったフランクルは考えた。青少年相談所の創造の構想が、討論の対象にされなければならなかった (Frankl, 1927b:69)。

オーストリアにおいて、教育学的に興味関心を抱いた人たちのサークルが、青少年相談所の考えに取り組み始めた。フランクルも、医学研究のかたわら、青少年相談所の考えに対して全身全霊をあげて打ち込んだ。フランクルはまず、ザウアーのモデルに基づいて、私的な相談所の創設を宣伝した。緊急処置として、彼の編集する個人心理学雑誌『日常における人間』において、心的な苦境の状態にある青少年の相談に関する欄を設けた (Frankl, 1927c:79)。そしてさらに、フランクルは、青少年相談所の創設を呼び掛ける論説を発表し、青少年相談所を基礎づけるための、最初の第一歩を踏み出すことが、雑誌『日常におけ

る人間』の編集局内において成功した (Frankl, 1927a:76). それは、青少年相談のためのオーストリアの事務所の創設を勢いづけた。その事務所は、共通の組織の中で、ドイツの事務所と同盟を結んでいた。ウィーンにおいて、青少年相談のための国際的な委員会が、重要な統一的組織の前段階として設置された (Frankl, 1928a:84-85). 1928年の2月初め、「青少年相談のためのオーストリア事務所」が創設された。ただちに最初のウィーンにおける青少年相談所の創立が企てられた。ポスターが掲示されて学校と青少年団体に配布された (Frankl, 1928c:92).

Ⅲ 青少年相談所での実践

1 青少年相談所の来談者

新郎新婦、妊娠中の女性、性病に罹っている人、結核に冒された人、大酒飲み、徒弟、どんな職業に就くべきかを知らない人、法律上の助言を必要としている人等、すべての人々を対象として、無料で情報を手に入れる青少年相談所が存在していることが宣伝された。教育することが困難な子供と、うまくやっていけない両親も、助言を求めた (Frankl, 1928c:91).

ウィーンの相談所の開設の最初の数週間に、個々の相談者に約140人以上の助言を求める人がいた。彼らのうち、約10パーセントが自殺の企図を心に抱くか自殺を既に試みていた。それに関する最大多数は、エロティックかつ性的な問題と葛藤であった (Frankl, 1928d:90). 相談の導入以来の最初の数週間に、相談所を訪れた約140人の助言を求める人のうち、その15パーセントだけにおいて、心的苦悩としての神経症的症候が存在した。他方、性的な問題とエロティックな課題が、相談のテーマの32パーセントを占めていた。職業の問題、家庭の不和等の多くのケースについては、神経症とは何の関わりもなかった (Frankl, 1928e:99). 相談所の設立以来の数ヶ月のうちに、300人以上の青年たちが、心的な

苦境において助言を見出すために、ここを訪れていた (Frankl, 1928b:102).

1928年2月初めの青少年相談所の創設以来、最初の数年間でおよそ700人の助言を求める人たちがいて、青少年相談所は延べ約3000人の訪問者に応えている。助言を求める人たちは、しばしば再びやって来た。3分の1がエロティックかつ性的な問題であり、さらに3分の1が家庭の摩擦であり、その他の若者たちは、神経症的な障害または純粋に医学的な事柄 (妊娠と性病、ないしは根拠のない不安) であった (Frankl, 1929a:106). フランクルはまた、別の論述で、1928年2月のウィーンの青少年相談所の創設以来、1500人以上の助言を求める人たちが相談助言者を訪ね、この訪問者数は延べ約5000回の訪問数に相応していることを記述している (Frankl, 1929b:110-111).

2 フランクルの青少年相談の方法

フランクルは、ザウアーの考えをモデルにして青少年相談所の創設を図った。彼の構想に基づいた、「私的な青少年相談」の本質的方法は以下の通りである (Frankl, 1927c:79, 1928c:91, 1928e:98-99).

- 多数の若者に、特に大都会にいる若者に、あらゆる心的な困窮において、熟練した信頼に値する人に頼ることのできる可能性を与える。
- 相談は、原則的に相談者の私宅において、確定した週の時間に催される。
- 男女の相談者のリストは、一部は新聞と雑誌の中で公表され、一部は通りのポスターで掲示され、学校と青年団体において備え付けられる。ポスターは、短い呼びかけを含む。事務所の住所と電話番号も含み、文書か電話での情報が与えられる。
- 相談は無料。助言を求める者が名を名のることは、要求されない。
- 最も厳しい秘密の厳守が確約される。
- 相談助言者は、専門医 (神経科医、精神病医、さらに婦人科医と皮膚性病学者)、法律家、心

理学者、教育者、福祉事業家、司祭等々である。
 ・全体としての処置も、個々の相談助言者の態度も、厳格に非政治的なものである。

上記のような青少年相談所の原則的方法からも、フランクルが、ザウアーの考えを踏襲していたことが見てとれる。若者の信頼が獲得されるように、自分の本心を打ち明けることに抵抗する抑制が除去され、話し合いへの意欲を妨げているすべての抑圧に対しての抵抗が、できる限り緩和されるように配慮しているのも、ザウアーの考えと同じであった。

フランクルは、青少年相談所を企図する時、あくまでザウアーのそれをモデルにして構想していったので、青少年相談所の実践の方法においては、フランクルとザウアーには本質的相違はないように伺える。ただ、フランクルにおいては、新聞、雑誌、パンフレット、ポスターといったあらゆるメディア、ジャーナリズムを活用して、青少年相談所を若者たちに宣伝していったことが特筆される(Frankl, 1926b:64)。フランクルは、公的な社会福祉機関と一緒の活発な共同作業は、特別に重要であると考えた。

3 青少年相談の具体的実践

フランクルは、青少年相談所に訪れた助言を求める者の数は、1935年の時点で約5000人に達し、その内、およそ900のケースについての資料を手中にしていると述べている(Frankl, 1935:130)。しかし、青少年相談所での具体的な実践例を記述として残してはいない。当時の青少年の、悲惨な状況下において苦悩に打ちひしがれている青少年のいくつかの事例については記録が見られるが、青少年相談所に相談に訪れた個々のケースについて、どのようにして苦悩する若者に精神的な支えを与え、「使命を持っているという確信、そして、責任を担うという自覚」へと導き援助していったのかについての論述は見当たらない。

しかしながら、助言を求める者が、青少年相談所を最も頻りに訪ねた要件である「性的な問題」

の領域についてのフランクルの論考を考察する時、フランクルが、苦悩の中にいる青少年に対して、精神科医として専門的に、しかも現実を見据えて、いかに真に若者の立場に立って誠実に向き合っていたのかを推察することができる。

フランクルは、性的志向に関しての思春期に達するプロセスは、本能の増加していく有機体が人格へ同化融合していく過程を表していると考えられる。最終的に、「衝動」「インパルス」「欲求」という成長の3つの理想的な段階の最後に、異性のパートナーとの精神的な同志の交わりを求めるエロティックかつ性的な傾向の融合が現れ、この時点で、エロティックな目的と性的な目的は一致するべきであると述べる。発達のこの理論にしたがって、理想的に成熟した人格は、性的に願望することができ、そこに、心理-知的な交わりがあるなら、性的経験は完全でかつ申し分のないものであると、性的志向に関してのモデルとしての発達理論を展開している。そして、一夫一婦制の関係と、エロティックかつ性的な欲求の統合は、正常な性的成長の目的を表し、同時に、性的な教育学の究極の目標を表していると、フランクルは結論づける(Frankl, 1937:139-140)。

したがって、青年に要求されるものは、フランクルによれば、「成功か失敗であるかもしれない恋に落ちることを学ぶこと」「パートナーのために闘うこと」「彼ら自身を再び解放すること」「孤独に耐え抜くことができること」である(Frankl, 1937: 140.)。

若者たちのための相談機関において、しばしば議論されている問題の一つ、「マスターベーション」に関しては、フランクルは、次のように語る。「もし、青年たちが、“性的な悩み”で苦しんでいるならば、私たちは、彼らを、同じような考えをもった男女のメンバーのいる青年団体に入るように強く勧める。知的かつ陽気な活動が満足を与え、そして、性的問題をいつまでもくよくよと気に病むことから逸らせてくれるのはもちろんのこと、彼または彼女の関心は、まもなく、この若き

男性か女性に特別にふさわしいと思われる異性へと向かっていこう。そして、このようにして、彼または彼女は、その人を愛しているという状態に入っていくだろう。この瞬間に、私または他の人が観察することのできたすべてのケースにおいて、性的な悩みは自動的に消失した。」(Frankl, 1937:141) また、「性的な禁欲の問題」に関して、フランクルは、身体的な医学の観点からと心理的な衛生学の観点から自らの見解を述べた後、最後に、その問題は、青年が、自らの決断においてその責任を引き受けなければならないことを主張する。すなわち、それは最終的には決断の問題であり、身体-医学的な観点からも心理学的な観点からも附与されることのできない領域の問題であり、この最終的な決断は、完全に倫理的な領域での決断に留まったままであると主張して、次のように語る。「助言者はだれも、当該の人から責任を取り上げる権利を持ってはいない。それどころか、彼に対して、彼の行為に対する責任を彼自身で引き受けさせることは、私たちの義務である。」(Frankl, 1937:142)

相談所を訪れた青年に対しての、この問題に関する相談助言の成果について、自ら次のように評価している。「幸運にも私たちは、より正確な情報を与えることによって、また心理療法的な治療によって、初期の性的神経症を取り除くことに、あるいは既に確立している形態を解消することに、しばしば成功している。」(Frankl, 1937:143)

4 青少年相談所の成果

ウィーンの青少年相談所の大きな成果は、以下の2点にまとめることができる。

一つ目の成果は、自殺の予防である。青少年相談所を訪れ助言を求めた青少年の大部分が自殺の考えを心に抱くか、あるいはまた自殺未遂を既に企てていた。このことを考慮するとき、ウィーンにおける青少年相談は、広い範囲において若者の自殺の企図を予防することができた、フランクルは考えている (Frankl, 1928c:92)。1930

年、ウィーンの青少年相談は、成績発表の時期に合わせて成績証明書の配布の日の前後に、特別なキャンペーンを実施した。その結果、ウィーンで初めて、生徒の自殺者が1人も記録されなかった (Frankl, 1995:48[86])。

もう一つの成果は、心の健康に関して、すなわち神経症の予防に関して大きな意味を持ったことである。神経症は、相談に来る時、青少年相談の活動によって効果的に予防された。青少年相談を価値豊かにしたのは、この心理-衛生学的な要因であるとフランクルは見ている (Frankl, 1928e:100)。

IV ログセラピーのアイデア

1 ログセラピーの構想の契機

ゾフナー (Heinrich Soffner) が、フランクルの論説「青少年相談所を創設せよ！」を引き合いに出しながら、青少年の心的な苦境についての自らの考えを述べた論文を公にした。ゾフナーは、プロレタリア階級の青年の心的な苦境は、社会的な性質に起因しており、経済的な困窮がひとえに青少年の心的な苦境の本質を形成し、それは、外面的な社会的な状況の改善によって取り除くことができるかと主張した。これに対して、フランクルは真向から反駁した。フランクルは、困窮に対しての自由な意志に基づく態度決定こそが、困窮の中での生きる姿勢を保つ重要な基軸であることを訴えている。「この経済秩序の内側で、勇敢な人々と意気地のない臆病な人たちが存在している。屈しないで持ちこたえている勇敢な人々と、そして、打ち負かされ屈服させられている臆病な人たちが存在している。まさに、事実上の状態だけが問題であるのではなく、それに対する態度もまた問題である。」(Frankl, 1927d:67)

フランクルは、経済的な困窮の中でも、その困窮に屈してしまっている人と、困窮の中でもそれに屈してしまうことなく持ちこたえている人の両者がいることを指摘し、経済的な困窮の真只中に

おいても、その中で苦境に立ち向かっていく態度決定の自由の余地が残されていることを指し示している。フランクルは、心的な苦境の原因が経済的な苦境にあることを認め、それを解決していくことの重要性を認めつつも、その解決に突き進むだけでは、政治的な解決だけでは若者の苦境は解決できないと考えた (Frankl, 1927b:69-70)。

フランクルは、青少年相談所において、同じ経済的な苦境の中でも、その困窮の中で勇敢に苦境に立ち向かい、打ちひしがれることなく屈服していない青少年たちが、生き生きと活動していることに着目する。フランクルは、若者を取り巻く外的な条件は、当時の若者の多くの自殺の、単なる「動機」、「きっかけ」にすぎないと看破した。当時のウィーンの青少年たちの中で、同じように困窮に苦悩し飢えに苦しんでいるにもかかわらず、あるタイプの青少年たちは、まっすぐに立ち、ある種の快活さを保つことができていた。彼らの自由な時間は、有益な取り組みによって埋められていた。彼らは、共同体の中で、遊び、徒歩旅行をし、スポーツをし、体操をし、学び、成人学校の講座に通っていた。あるいはまた、何かある組織内で、自由意志による援助者として働いていた。空腹の中で、図書館で自発的な助手として働いているか、市民大学で整理係の仕事を果たしていた (Frankl, 1933:126)。フランクルは、このタイプは、何が優れているのかを理解しようとした。同じ苦境の中にいるのに、この違いはどこから生じて来るのかと自問し、彼らの内面で遂行される、外的状況に対しての自らの「態度決定」こそが、決定的に重要であるという結論に至る (Frankl, 1935:133)。

物質的な苦境はそれ自体で直接的に心的な影響に至っているのではなく、人格によるその精神的な消化、すなわちそれに対する人格的態度決定によって初めて決定的な要因となっていることを、フランクルは見抜く。そしてさらに、外的な困窮に対して屈服することなくそれに立ち向かい、積極的に自分の人生を切り拓いていこうと

する、人生に対するポジティブな態度はどこから生じて来るのか考察を進め、彼らが内面的に満たされていることを究明する (Frankl, 1936:136-137)。

生を肯定し心が満たされて、快活に生きている若者のタイプは、人生の意味内容、人生を充実させるものを、内に持っていた。そして、内面的に満たされていることの内実とは、「生の意味の信頼」に満たされていることであり、人間の根源的な欲求は、人生の意味内容、人生の目的、現存在の意味を求める欲求であることを見抜く。この生命の充足は、使命と任務をもち、それを果たしていく責任を引き受けていくことの中にこそ存在していた。フランクルは、経済的困窮の中で人生を意味豊かに生きている具体的な姿を眼前にして、人生の目標と目的を持つ人間は、任務、使命を持つ人間は、その困窮に打ちのめされることなく、有意義な時間を過ごしていることを経験する。逆に、そのように前向きに生きている人間は、経済的な困窮を脱していくチャンスがより多くあることを知る。苦境の中にある青少年を前にして、フランクルが曇りなき目で青少年を見たとき、フランクルが捉えた青少年の苦悩の本質は、経済的な外的な苦境ではなく、外的な経済的な苦境に打ち克つ根拠となる「生きる意味」が存在していないことであった。人間の心的・精神的な現実世界を正当に評価したとき、実存を支える最終的なカテゴリーは、「充足のカテゴリー」「意味発見のカテゴリー」であるという見解に達する (Frankl, 1933:127)。

したがって、若者を、使命を果たしていく責任性へと、物質的な苦境を態度決定によって消化して乗り越え自らの生を充足させていく責任性へと教育することこそ、相談助言者の為すべきことであるとフランクルは考えた。困窮にうちひしがれて失望し、そのことからさらに苦境に陥っていくという悪循環から脱出させていくためには、そのサイクルを絶ち、自分自身に課せられた責任を引き受けるという「態度の転換」へと援助していく

ことが大切であると考え、そのことを青少年相談の大きな眼目としていかなければならないと主張する。ここにこそ、ロゴセラピーの契機が見出される。相談者に態度決定を要求し、自らの人生の意味を信頼し、その充足に対して「責任を担う」という世界観へと導くことは、単なる心理療法の枠組を超えて、心理療法の中へ哲学を導入し、心理療法に哲学を応用していこうとする試みでもある。ロゴス、意味と価値の世界へと相談者を導こうとする。相談助言者の役割は、助言を求める者から彼の決断の責任を取り除くことへは誘惑されてはならず、助言を求める者を、自分自身の責任性へと教育することを心にかけていなければならない。その責任性から、助言を求める者は、適切な個人的な状況にふさわしい使命に至る道を見つける。青少年の困窮が治療されなければならない本質的な地点は、責任を肩代わりさせる代わりに、責任性へと教育すること、責任を担う人間へと、助言と励ましによって導いていくことをスタートとする地点であった (Frankl, 1935:134-135)。

「相談者は、残念ながら、青少年の経済的な状況をほとんど変えることはできないが、それに対抗して、たいていの場合、経済的な状況に対する態度に影響を与えることができる。相談者は、当事者が経済的な苦境に耐えることのできる能力を獲得するという、この種の転換を引き起こすべきである」(Frankl, 1933:127) という考えが、フランクルのロゴセラピーの構想の契機であった。

2 ロゴセラピーの構築へ

フランクルは、強制収容所に収容される前に、以下の3つの重要な論文を発表する。「心理療法の精神的な問題性に対して」(1938年)、「精神病医の自省」(1938年)、「哲学と心理療法 実存分析の基礎づけ」(1939年)。そこでは、青少年相談所での実践の中で集積された経験の宝が、新しい心理療法のベースを形成しているのを見ることができる。いわば、ここで論述されている理論が、強制収容所に収容される前に到達したフランクルの思想と考えるとよいだろう。フランクルが、

彼の実践をどのような心理療法の形に結晶させていったのか、この三つの論文を分析しつつ考察を深める。

フランクルは、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学の限界を指摘する。フランクルの解釈は以下の通りである。精神分析医は、神経症的な症候の発生の契機を、抑圧の中に、意識内容の無意識化の中に、その本質が存しているととらえる。精神分析における治療の原則は、抑圧の破棄の意味において意識的になるようにさせることである。それに対して、個人心理学的な治療法においては、神経症的症候は責任を転嫁するという個人の試みとして解釈される。両方の学説は、心的な現実を制限している。精神分析は、最終的な解決において常にリビドー的なものだけを承認しているのに対して、個人心理学的な見解では、心的な生起を制約し、神経症的な形態を目的への手段と評価する。精神分析と個人心理学は、根本的立場においては、お互いの必然的な補完のみを描出している。精神分析の行為の信条は、現実世界への衝動性の適応であるのに対して、個人心理学は、自我の側からの現実の勇敢な形成に到達するという治療上の格言を持つ (Frankl, 1938:166-167)。

以上のような解釈に対して、フランクルは、適応と形成の外に、より包括的な次元が存在しないのか、心的—精神的な現実世界を正当に評価するとき、人間像の中に含めなければならない最終的なカテゴリーは何なのかと問う。フランクルは、このカテゴリーは、充足のカテゴリー、意味発見のカテゴリーであると答えて、次のように述べる。「心的なものを超えて達しつつ、人間的実存のすべての深みと高みにおいて、全人間的実存を顧慮し、そしてそれに応じて、実存分析と呼ばれうる、まったく心的な、特に神経症的な生起についてのあの理論は、どこにあるのだろうか？」(Frankl, 1938:168)ここに、1933年に初めて用いられた「実存分析」という術語が論文の中で使用され、その概念が形作られていく。しかし、

実存分析においては、意識的に価値づける心理療法が必然的に伴う、特殊な危険が明白であった。患者に対しての、純粋に医療的な行為の越境、かつ、医師の人格的世界観の強要の危険である。患者に対して世界観的な意識的な価値づけの態度決定を求めるのだが、その態度決定は可能であるかどうか自問しなければならなかった。「価値づけの必要性」と「強要の不可能性」というジレンマの問題状況に達する。そのジレンマに対し、素朴な包括的な思慮が解決を見出すとフランクルは考える (Frankl, 1938: 168-169)。「意識—存在の傍の責任—存在が人間の現存在を形成している」(Frankl, 1938:169) というところを出発点とする、人間の現存在の最も深い熟考がそのジレンマを解決できるとフランクルは考える。人間の人格の責任性を、人間学的な中心概念とみなし、それは倫理的に中立な概念を意味しているとフランクルは考える。フランクルは、その考えを、青少年相談所での具体的に体験した例を挙げた後で、次のように説明している。

「青年が、ある内容を、ある目標を見出すということ—どんな種類のものなのか。それは、そう、もはや相談助言者の事柄ではない。彼は、助言を求める者から彼の決断の責任を取り上げるか、ないしは、その責任を自分自身に転嫁させることへは、決して誘惑させられてはならない。彼は、むしろ、あらゆる本物の心理療法医と同様に、まさしく、助言を求める者を、自身の責任性へと教育することを心にかけていなければならない。その責任性から、当人は、それだけにますます、より迅速に、より容易に、彼に適切な、そして社会的な状況と同様に個人的な状況にふさわしい使命に至る道をうまく見つけるだろう。この精神的な困窮が、もしかすると、たとえ表面的かつ通俗的な価値判断にとって最も目立たない点であろうとも、そこから青少年の困窮が治療されなければならない最も本質的な地点である。」(Frankl, 1935:133-134)

すなわち、現存在を責任存在として理解させる

とき、責任性を実存の根本的な基礎として意識させるとき、そのことは既に価値づける態度決定に対しての無条件的な拘束力を内容として含んでいると、フランクルは考える。責任性を意識するようになった人間は、この責任性から価値づけることを強いられているのだ。しかし、どのように価値づけるのか、どのような価値の序列を樹立するのか、それは、医師の影響力の行使から免れている。意識的になった責任性から、独りで自主的に個性に適した価値と価値の序列に向かって突き進んで行くということが要求される。この具体的な態度決定に対しては、個々の価値内容に対しては、医師は介入を行使することを断念しなければならない。フランクルは、青少年相談所での実践を積み重ねた結論として次のように述べた。「人間的な援助としての、特殊な形態としての相談は、その固有の精神的な問題性を持つ。その問題性は、一方において、相談の内容に対しての相談助言者の肯定的な責任の緊張から、他方において、助言を求める者が自由な責任性の中で為さなければならない決断の、十全な完璧さに対しての、相談助言者の否定的な責任から生じる。」(Frankl, 1935:135)

最終的には、相談助言者は、相談者に対して問う者ではなくて尋ねられている者であるということを知覚させなければならない。自分自身を尋ねられた者として体験するとき、人生の側から絶え間なく問いを立てられている人間として、使命の充足の只中にはめ込まれた存在として自分自身を体験するとき、現存在の責任性の根源的事態に合致すると、フランクルは考える。フランクルが青少年相談の実践の最中で語っている「心的な健康と、それとともに生きる喜びは、何よりもまず成し遂げられる業績の、充足する体験に依拠している」(Frankl, 1936:138) という言葉は、その確信であったと考えられる。唯一性と一回性において、自身の人生から意味を取り出すことのできる人格的な能力、自主的に意味発見のできる能力へと、心理療法医は患者を導いていかなければ

ならないとフランクルは考察を進めた。(Frankl, 1939:187-188) まさにこの考えがベースとなって、フランクルのロゴセラピーのアイデアが創出され、そして、ロゴセラピーの構想の核心となっていた。

V おわりに

フランクルは、青少年相談所に相談助言を求めてやってきた青少年に対して、人間対人間として誠実に真摯に対峙し、彼にレッテルを貼ったり、あるタイプの人間として類型化して見ることなく、虚心坦懐に、彼の中に偽りなき人間を見ようとした。ある理論、原理から出発して、その原理や理論を前提にして青少年を導き指導しようとしなかった。若きフランクルが、青少年相談所において、苦悩する青少年に対峙して見たものは、裸の人間、人間そのものであった。若者の声に虚心に耳を傾け、その底に苦闘している人間そのものを見ようとした。その時、人間の実存の最も深い基盤に対しての普遍的な熟考へと導かれていった。その具体的な一つ一つの誠実な実践の中で築き上げていった彼の人間観は、フランクルの中で整理され、ある確信となってロゴセラピーのアイデアへと結実した。

自分に与えられた現実や運命に対して、どのようなときでも、「ある態度をとることができる」という考えから出発したフランクルのロゴセラピーは、戦後さらに、明晰な考察のもとに掘り下げられ鮮明化され実践されていく。人間は、自らに与えられた生物学的事実、心理学的事実、社会学的事実のそれぞれから自分を引き離し、それに対して態度をとることができる自由を持った存在であるという確信が、フランクルのロゴセラピーのベースとなる。人間は、身体的および心理的な現象と明確に区別される精神的な (geistig) 現象の次元において、世界と自分自身に対して立ち向かうことができるというのだ。殊に、フランクルは精神 (Geist) と心 (Seele) をはっきりと区別し、「心

理的な現象」に従うのか、それともそれに抗するのかを定める、「主体的な決断の自由」が人間の中に存しているというのが、フランクル独特の考えであり、その主体的な決断の場が、精神 (Geist) の次元なのであり、その精神的な (geistig) な次元にこそ、まさに人間の本質的な特徴があると主張した。人間は決断する存在であり、「その瞬間、瞬間に彼が決断しているものは、その次の瞬間に彼がそれに成るもの」(Frankl, 1950:50[92]) である。

すなわち、フランクルの説くロゴセラピーの基盤となっている人間観は、人間を「いかなる状況にあっても決断し、次の瞬間に決断したところのものになっていく自由を持っている」精神的な存在であると考えた人間観である。意味の充足と価値の実現に対しての責任を持つ存在である。そして、その意味と価値は主観的なものではなくて客観的世界であり、コスモスともいべき秩序ある世界である (Frankl, 1956:175[107-108])。ロゴセラピーは、本質的に責任性への教育であり、この責任性から、人は、人格的存在の具体的な意味に向かって自立して突き進まなければならない。フランクルは、次のように明言する。「実存分析の最終的な意図は、そのように人間が自分の自由について自覚することにあります。そして、ロゴセラピーの最終的な意図は、このように人間が自分の責任に基づいて、意味や価値の世界に対して、つまりまさに『ロゴス』と倫理 (エートス) に向かって自己決定することにあります。」(Frankl, 1975:145[224]) まさしく、その「最終的な意図」へと、若きフランクルが接近していたことが、本研究において明らかになったと考える。若きフランクルの思想形成のもう一つの側面である、シェーラー、ヤスパース、ハイデッガーらの影響については、別稿で論じたい。

【引用・参考文献】

- Frankl,V.E.:Schaft Jugendberatungsstellen,In:Die Mutter, 2.Jg., n.39, 1926 (V.-Frankl,G.(Hrsg.): Vikor E. Frankl; Frühe Schriften 1923-1942, Wien /München /Bern 2005) 以下, 本書からの引用は F S と略記 a
- Frankl,V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen!,In: Der Abend, 31. 8.1926 (F S) b
- Frankl,V.E.: Was ist Jugendberatung? ,In: Der Mensch im Alltag,1.Jg.,Nr.3,1927 (F S) a
- Frankl,V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen, In: Die Praxis,Mitteilungen für die Organisationsarbeit der Sozialistischen Arbeiterjugend Deutschösterreichs, Nr.4,1927 (F S) b
- Frankl,V.E.: Jugendberatung,In: Der Mensch im Alltag,1.Jg.,Heft 5/6,1927 (F S) c
- Frankl,V.E.: Zur Frage der Jugendberatung, Eine Entgegnung ,In:Die Bereitschaft,7, Nr.5,1927 (F S) d
- Frankl,V.E.:Jugendberatung!, In:Der Tag, 18, Februar, 1928 (F S) a
- Frankl,V.E.:Die Wiener Jugendberatungsstellen, In: Lehrlingsschutz,Jugnd-und Berufsfürsorge, 5.Jg., Nr.10,1928 (F S) b
- Frankl,V.E.: Jugend in Not ; Die Wiener Jugendberatungsstellen, In: Arbeiter-Zeitung, 22.07. Nr.202, 1928 (F S) c
- Frankl,V.E.: Jugendberatung (I), In: Die neue Generation, Publikationsorgan des Deutschen Bundes für Mutterschutz und der Internationalen Vereinigung für Mutterschutz und Sexualreform, V.1928 (F S) d
- Frankl,V.E.: Jugendberatung (III) Methoden und Ergebnisse,In:Blätter für das Wohlfahrtswesen der Stadt Wien,27, n.268, 1928 (F S) e
- Frankl,V.E.: Was ist Jugendberatung? In:Frankl, V.E. , Bühler,Ch.,Kogerer,H., Lukacs, H.(Hrsg.),Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag,Wien1929(F S) a
- Frankl,V.E.: Selbstmordprophylaxe und Jugendberatung,In:Münchener Medizinische Wochenschrift, 76.Jg.,Nr.40,1929 (F S) b
- Frankl,V.E.: Wirtschaftskrise und Seelenleben, Vom Standpunkt des Jugendberaters, In:Sozialärztliche Rundschau,4 , Nr.3,1933 (F S)
- Frankl,V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung,In: Psychotherapeutische Praxis,7,1935 (F S)
- Frankl,V.E.: Die seelische Not der arbeitslosen Jugend ,In:Blätter für Krankenpflege und Fürsorge, III . Jg.,Nr.11-12, Nov.-Dez. ,1936 (F S)
- Frankl,V.E.:Erotic Problems of modern Youth, In: Marriage Hygiene, III ,No.3,February,1937 (FS)
- Frankl,V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, In:Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, 10, 1938 (F S)
- Frankl,V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, In: Schweizerische Medizinische Wochenschrift,69,1939(F S)
- Frankl,V.E.:Homo Patiens, Versuch einer Pathodizee, Wien 1950 [V.E. フランクル (真行寺功訳)『苦悩の存在論』新泉社 1972年]
- Frankl,V.E.:Theorie und Therapie der Neurosen, Wien 1956 [V.E. フランクル (霜山徳爾訳)『神経症Ⅱ その理論と治療』みすず書房 1961年]
- Frankl,V.E.:Der Leidende Mensch Bern 1975 [V.E. フランクル (山田邦男監訳)『制約されざる人間』春秋社 2000年]
- Frankl,V.E.:Was nicht in meinen Büchern steht,Lebenserinnerungen, München 1995 [V.E. フランクル : 山田邦男訳『フランクル回想録』春秋社 1998年]
- Kreitmeir, C.: Sinnvolle Seelsorge, München1995. 諸富祥彦「訳者解説」教育思想研究会編『教育と教育思想』第12集,1992年.
- Riemeyer, J.: Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen, Bern 2007.
- Sauer,F. :Jugendberatungsstellen ; Idee und Praxis 1914-1923, Leipzig 1923.
- Zsok,O. : Der Arztphilosoph Viktor E. Frankl, München 2005.

受領 2014.8.31 採択 2015.1.10